

ポルトガル紀行

——オビドスを訪ねて——

カレイラ松崎順子

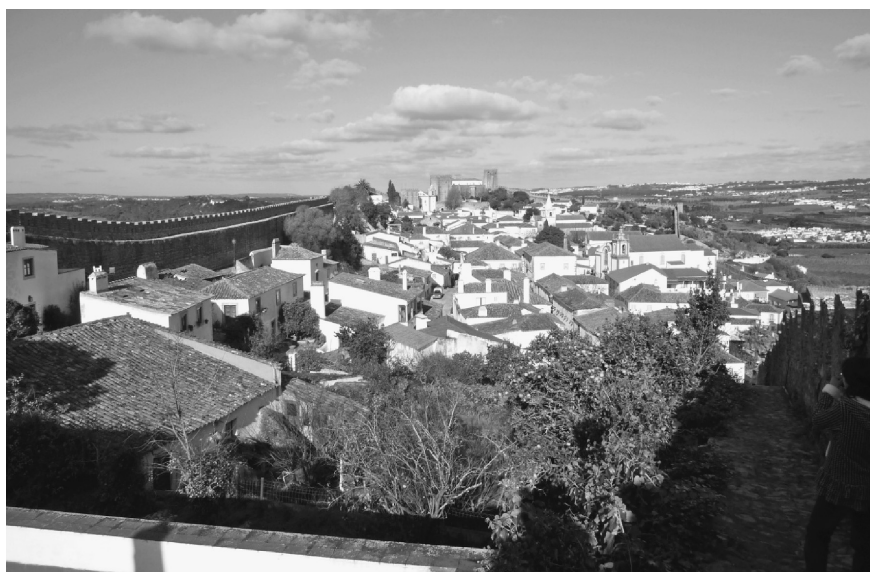
10年ぶりにポルトガルを訪れたが、相変わらずラテン民族特有ののんびりした空気に包まれていた。本稿では、ポルトガルの観光地の一つであるオビドスの紹介を行う。

オビドスはリスボンから北へ80キロほど行った小さな町である。町の起源は古く、発祥は1世紀とされ、ローマ時代に海からの侵入を防御するために、砦が建設されたのが町の始まりといわれている。以後ローマ人やアラブ人による占領の後、12世紀にはポルトガル初代王ドン・アフォンソ・エンリケスがアラブ人から奪回し、13世紀にデニス1世の妃イザベルが山間のこの地を気に入り、以降19世紀まで代々の王妃の直轄地となった。

城壁に囲まれた街並みには、中世の面影が色濃く残っており、ローマ時代から敵の侵入を防ぐ城壁は高く厚い壁で囲まれ、その城壁の高いところに一周できる狭い通路がある。そこから城内が見渡せ、振り向けば城外の大草原が一望できる。まさに、長い歴史を守り続けてきた町の、城塞である。町を囲むオビドスの城壁には無料で登ることができ、城壁の上からの景色を楽しみながら、ゆっくり散歩を楽しむことができる。

狭い石畳の路地の両側には、白い壁の家が並んでいる。子供たちが遊んでいたりと、家からテレビの音が聞こえてきたり、人の暮らしが見えてくる。白い壁の窓には花が飾られ、カフェやレストラン、お土産屋などが続く。お茶を楽しんでいる人、散策をしている人、のどかで、とても小さな町であるオビドスは城郭都市であり、城壁の中に佇む町は、白壁の家や石畳の路地が中世の雰囲気漂わせ、「谷間の真珠」とか「中世の箱庭」と呼ばれている。

石畳が続くメインストリートは、お土産屋が並んでいて、とても活気に満ちている。私がオビ



城壁からの眺め



狭い路地に並ぶ白い壁

ドスを訪ねたときは、クリスマスで休みの期間であったので、かなりの数の観光客が訪れていた。さらに、ポップコーン、焼き栗、サンドイッチなど様々な食べ物の屋台も出ていた。今回は、ベーコンやショーリツ（日本のサラミのようなもの）入りのサンドイッチを食べてみたが、出来立ての温かいサンドイッチで、パンも弾力があり、とても美味しかった。以前リスボンやポルトに住んでいたときには食べたことがなかったので、後から調べてみると、パン・ドゥ・ルジョoins（pão de rojões）またはパン・デ・ショーリツ（pão de chourico）というオビドスやナザレなどの特産のサンドイッチだという。



メインストリートのお土産屋



ジンジーニャのお店

一番の名物はジンジーニャ (Ginjinha) というさくらんぼの果実酒で、特に、チョコレートのコップに入ったジンジーニャ・ノ・コポ・デ・ショコラテ (Ginjinha no Copo de Chocolate) がオビドス名物である。

オビドスのお城は現在、ポルトガル国内に44ある国営ホテル『ボザーダ』のひとつとして使われている。オビドスの『ボザーダ』はものすごく人気があるので、もし泊まりたいなら、かなり前からの予約が必要になる。今回は『ボザーダ』に泊らなかったが、いつか機会があったら、ゆっくり過ごしてみたいと思っている。ポルトガルのお城というとシントラが一番にあげられるが、私はシントラよりもオビドスのほうが、活気があって、南国の国ポルトガルを象徴しているような感じがした。シントラには1年間ほど住んでいたのだが、とにかく湿気が多く、じめじめしたイメージがあり、シントラの坂はいつも湿っているような感じで、滑りそうでとにかく怖かった。あいにく今回もシントラを訪ねたときには雨が降っており、とても寒く、観光客もほとんど来ていなかった。ポルトガルではシントラのお城が有名であるが、リスボンからもあまり遠くないので、ポルトガルを訪問した際には、ぜひオビドスを訪ねてほしい。